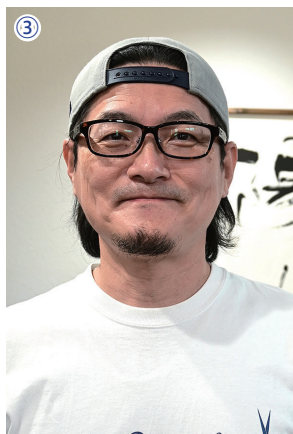




② 長いつきあいの常連さんの散髪をする常朝さん
② 町内在住の書家から贈られた励ましの書。大切に飾ってあります
③ いろんな話を聞かせてくれた常朝さん



「という書が目飛び込んできた。」「地震後に書家の方から贈っていた作品です。通りから見える場所に飾っていたら、一人の男性がこの書を見て涙を流しておられました」と常朝さんは、この励ましの書を大切にしています。

19歳で理容師の道に入ったという常朝さん。「家業を継ぐ使命感というより、自然とこの世界を選んだ気がします」。父の忍さんと共に店に立つてきた常朝さんは、理容師としてのこだわりの違いから対立もしばしばだったとか。「お互い職人気質で頑固もん同士。相いれないことも多くてね。今では笑い話ですけどね」と、すでに忍さんは勇退。それまで忍さんを手伝ってきた妻の怜子さんは、現在は息子である常朝さんのサポートにまわり、絶妙なタイミングで温かいタオルを渡します。

「誰しも、髪型が決まると一日中

お地蔵さんを一堂に集め、通りで披露したそうです。また組ごとに手作りの「つくりもん」がそれぞれの店内に飾られ、見物客を楽しませました。「子どものころは、つくりもんを使う竹や杉の葉、藻を取りに行ったりして手伝わったものです」と懐かしむのは、上町で長年親しまれた「すし源」3代目の吉本光雄さんです。

すし源の始まりは戦前。光雄さんの祖父の源吾さんが魚屋として開業し、父の源吉さんが仕出しと寿司、宴会場として事業を展開していきました。歴代にわたる家業に終止符が打たれたのは熊本地震後。「店の被害も大きかったし、私の代で終わらせることに。町民の皆さんに本当にお世話になった店でした」と話します。そんな光雄さんは今、妻の秀子さんと共に、

1世紀近くに及ぶ新聞販売業

毎日、夜明け前の決まった時間に新聞受けから聞こえる投函の音とバイクの発進音。それは一日の始まりを告げる音でもあります。



手入れが行き届いた松岡家の庭



旅行やゴルフなどプライベートな時間を楽しんでいるという、毅さんと喬子さん

気分がいいもの。この仕事をやっててよかったと思うのは、お客様が笑顔になられて『ありがとう』と『ごさいます』と言ってくれたこと。うれしそうに答えてくれました。



以前、熊本高森線沿いにあった地蔵が市ノ後天神社の一角に集められています



地元の人たちに親しまれたすし源のかつての姿 (写真は吉本さん提供)

すし源の始まりは戦前。光雄さんの祖父の源吾さんが魚屋として開業し、父の源吉さんが仕出しと寿司、宴会場として事業を展開していきました。歴代にわたる家業に終止符が打たれたのは熊本地震後。「店の被害も大きかったし、私の代で終わらせることに。町民の皆さんに本当にお世話になった店でした」と話します。そんな光雄さんは今、妻の秀子さんと共に、

お地蔵さんを一堂に集め、通りで披露したそうです。また組ごとに手作りの「つくりもん」がそれぞれの店内に飾られ、見物客を楽しませました。「子どものころは、つくりもんを使う竹や杉の葉、藻を取りに行ったりして手伝わったものです」と懐かしむのは、上町で長年親しまれた「すし源」3代目の吉本光雄さんです。

創業は明治 4代にわたる理容室

3年前に同じ上町から移転した「Barber・Morishima (バーバー・もりしま)」。店主の守嶋常朝さんは4代目で、明治のころに曾祖父が理髪店を開業したのが始まりだそうです。

店内の壁に飾られた「陽はまた昇

んと」目に入れても痛くない」ほどのかわいい孫たちの世話をするのが日課とか。末孫を抱きながら「この子たちの成長が楽しみでなりません」と目を細めました。



左から吉本秀子さん、末孫の莉那ちゃん、光雄さん

懐かしい地蔵祭りをつくりもん

木山上町・下町・蛭子町周辺は、古くから秋津川や木山川の流れを利用して栄えた、米や材木の集積地で

した。明治・大正・昭和と時代を移しながら町としての機能が整い、盛時には約130軒の店が軒を連ねていたそうです。

お地蔵さんを一堂に集め、通りで披露したそうです。また組ごとに手作りの「つくりもん」がそれぞれの店内に飾られ、見物客を楽しませました。「子どものころは、つくりもんを使う竹や杉の葉、藻を取りに行ったりして手伝わったものです」と懐かしむのは、上町で長年親しまれた「すし源」3代目の吉本光雄さんです。

ちょっとそこまで / わがまち散歩

vol.55 木山上町・下町・蛭子町編

4車線化が進む熊本高森線。木山交差点回りも道路拡張工事の真っ最中で、以前と比べ景色もずいぶん様変わりしました。

今回は、周辺のいろんな歴史をひもときながら、散歩を楽しんでみました。